

わたしのカラダのことで、フェイトちゃんの知らないことなんてない。

自身の肌を這うようにつたうフェイトの指先と、耳元で囁かれるまどろむような甘い声に身をゆだねながら、なのははふとそんなことを思った。

「ん……あっ」

フェイトの指が、髪が、脚が、舌が、なのはの身体を思うがままに蹂躪していく。

「フェイト、ト、ちゃ……」

怖い、と思ったことは一度も無かった。

身体の反応するままに、自身の全てをフェイトにゆだねる。

ときには身体の芯をまっすぐに貫くように、ときにはその肌をふわりと包み込むように。

「なのは……なのは」

フェイトの声で名前を呼ばれるたびに、なのはは身体だけでなく、その心までも愛撫されているような気分になる。

「や、フェイト、だめ、ん……っ！」

紅潮した肌と荒い息づかい、抑えようとしても漏れてしまふなのはの蕩けるような声が、達するまでもうあとわずかであることをフェイトに知らせていた。

「なのは……いいよ」

フェイトの指が、なのはの奥深いところに入り込む。

なのはの肌を焦らすように這っていた舌が、なのはの最も弱いところを唾液で包むようにかすめた、その瞬間だった。

「フェイト、ちゃ、あ、ん、やあああ……っ！」

悲痛とも歓喜ともつかない声と共に、なのはの身体が二、三度大きく跳ねる。

「は……ふ、はあ……」

四肢の力が全て抜け落ちてしまったかのような感覚に、なのははそのままベッドに崩れ落ちた。

「フェイト、ト、ちゃ……」

何度も胸を上下させてなんとか呼吸を整えながら、視線を動かして愛しい人の姿を探す。

抱きしめて欲しい。

微笑みかけて欲しい。

だが。

「フェイトちゃん……？」

その瞳に映ったのは、自分を見下ろすフェイトの、今にも泣きだしてしまいそうな、まるで親とはぐれてしまった幼い子供のような顔だった。

「なのは……っ！」

と、突然なのはに覆い被さるようになって、フェイトはなのはの唇に貪りつくように自身の唇を重ねた。

「んん……っ！」

フエイトの舌が、なのはの口内にねじこむように押し入ってくる。

「ん、う、む……！」

そうしてフエイトは、まだ力の入らないなのはの身体を抱きかかえ、そのまま唇を喉元から胸元へと這わせ始めた。

「や、フエ、んっ！」

先ほどまでとは違う荒々しい舌使いと、それに合わせるかのようになのはの弱いところばかりを責めてくるフエイトの指に、なのはの身体がまた大きく跳ねる。

「あ、だ、だめ、フエイトちゃ、まって、あ、あああああ……っ！」

再度の絶頂。

内股のあたりに痺れるような感覚を覚えながら、なのははフエイトの両腕にもたれかかった。

「は、あ、ん……あ」

肺に空気を送り込もうと、なのはが何度も肩を上下させる。

「ふ、あ、あ……う？」

小刻みに震えるなのはの顎を、フエイトは指先でそっと摘んだ。

「なのは」

「え……あ、んっ！」

そうしてまた、貪るようなキス。

「フエイト、ちゃ、や、あ、だ、ん……っ！」

まるでなにかにすがりつくように、なのはの身体をフエイトの指先が這い回る。

その指使いに、なのはの背筋を悪寒のようなものが走り抜けていった。

そう。

自分の身体のことを、誰よりも、おそらくは自分自身よりも、よく知っている相手。

その相手が、もし本気で、自分の身体を責めてきたとしたら。

自分は、いったいどうなってしまうんだろうか。

「なのは……！」

「や、フエ、フエイト、ちゃん……！」

「なのは、なのは、なのは……っ！」

それから、どれだけの時間が過ぎたのかはわからない。何度、達してしまっただのことも覚えていない。

気付けば、もはや指先一つ動かすこともできず、声らしい声が発することが出来ないほどに、なのははその身体をフエイトに思うがままに責め抜かれ、フエイトの腕の中にくったりと横たわっていた。

頭の中が朦朧として、今が現実なのか夢の中なのかの区別すらつかない。

ただ、にじむ視界の向こう側で、フエイトは何故か、涙

